

# ルターの「聖徒の交わり」(communio sanctorum)

— 日本の伝統的靈性との対話 —

石 居 基 夫\*

## 抄 録

日本の祖先儀礼の背後には、共同体志向型靈性と自然志向型靈性とが認められ、共同体や自然に対する特別なニーズがあると考えられる。こうした日本の伝統的靈性はキリスト教宣教への妨げとも言われるが、同時に西欧的キリスト教に対して、個人主義やエコロジカルな危機に関して問いかけを持っている。日本における宣教への取り組みはこうした日本的靈性の持つニーズや問いかけに対して福音がどのように応えていくのかということを示していかなければならない。

本論文は、ルターの「聖徒の交わり」の概念が、死者も生者も含んだ神の前におけるすべての信仰者の交わりと、すべての被造物についての包括的な救いへの約束と希望を示すことを明らかにし、日本的靈性にたいして一定の有効な答えとなりうることを示す。

また、この「聖徒の交わり」の概念を深く探ることを通し、非キリスト者である祖先の救いの問題について、実践的で牧会的な言葉を見出すことを試みる。

**Keywords** : 祖先儀礼, 聖徒の交わり, ルター, 日本的靈性, 土着化

## 序

日本人の持っている祖先崇拜、もしくは祖先儀礼は、日本におけるキリスト教の宣教について、大きな妨げといわれる。しかし、またそうした日本人の宗教性を無視して日本の宣教は進まない。たとえば、カトリックでは日本の祖先儀礼の中心

を担う家庭の仏壇を模した家庭祭壇を用いるなどして、この日本人の宗教性との調和を試みている。そうした例は一つの実践的方法ではあるが、実際に日本人の祖先儀礼などに対して、いかにキリスト教の福音は向かい合ってきたのだろうか。

明治におけるプロテスタント宣教の歴史においては、宣教師が信徒に対し、仏壇や神棚は異教的なもの、偶像崇拜に当たるとしてこれらを家庭から排除するべきことを教えた時代もある。こうした過激な対応については一定の反省がなされてきたにしろ、基本的に日本人が伝統的に守ってきた

\* Ishii, Motoo

ルーテル学院大学准教授 (キリスト教学科)

宗教的な心情に対して、具体的な対応は積極的に論じられることは少なかったといつてよいだろう<sup>1)</sup>。

この小論においては、日本人のもつ宗教的ニーズをとらえつつ、それに対しキリスト教信仰が何を持って答えるものであるのかを考えたい。具体的には、日本人の祖先儀礼の背景にある二つの宗教的なニーズをとらえながら、ルターの「聖徒の交わり」という概念が、どのようにその二つの宗教性に対してキリスト教的な福音を示すものかを示すこととなる。

同時に、しかし、この日本的な宗教性との対話が、これまでの西欧中心の神学の中では十分に取上げられないできた福音の視点を浮き彫りにするものであることを示したい。

## 第1章 日本の二つの伝統的靈性

祖先儀礼の背景に二つの特徴的な靈性を見ることができ。すなわち、共同体志向型の靈性と自然志向型の靈性である。こうした靈性、もしくは宗教性はおそらく日本の農耕文化の中ではぐくまれたものだと考えられるが、すでに農耕社会とは言われない現代の日本にあっても、なお日本人の心の深層に影響を及ぼしていると考えられる。

### (1) 共同体志向型の靈性

たとえば、加藤周一は日本人の死生観の特徴として、「第一に、家族、血縁共同体、あるいはムラ共同体は、その成員として生者と死者を含む。」<sup>2)</sup>とのべ、さらに「第二に、共同体の中で『よい死に方をする』ことは重要である。」<sup>3)</sup>という。

日本人の伝統的な死生観においては、死という出来事が死者と生者とのあいだに大きな断絶をもたらすものとは考えてない。死者の魂は、生きている者と同じ共同体の中にある。具体的に仏壇や神棚がそうした死者の霊の宿る場所とされているし、そこで死者に食事が毎日用意され、また死者との対話が持たれるのである。だから、死んだ者は自分たちの周りからいなくなるのではなく、形を変えてその共同体の中に生き続けている。ある

種の連続性のなかで、死そのものを乗り越えていこうとするのである。また、この共同体志向型の靈性は、個人の価値より、その属する共同体全体の調和と繁栄を生み出すことにより大きな価値を見出すものといつてもよいだろう。

日常的に、あるいは季節やそれぞれの記念する日においてなされる祖先儀礼においては、人々は伝統的な家共同体を中心として自分たちに近い死者を祭り、または供養をする。この祖先儀礼によって遺された者はその死者を一つの共同体のうちに留め、また覚えるのである。また、他方でこうした儀礼をとおして、死者は安らかにされるのである。日本では、そうした儀礼において、死んだばかりの荒々しい魂が鎮められ、神もしくは仏となるものと考えられてきた。死後の平安は、ひとえに遺されたものの祖先儀礼によって決まってくるのである。反対に、祭られた、あるいは供養をされた死者は、その祭る家族や共同体を災疫から守り、現世的御利益を約束する。つまり、生者と死者は互いに互いの益を与えあう関係になっているのである。それゆえに、この共同体志向型の靈性は、日本人の生活のなかにしっかりと根をおろしてきたと言えるだろう。

### (2) 自然志向型の靈性

梅原猛などの縄文時代のアニミズムへの回帰論に見られるように、日本人は、自然の中にある様々な霊との共生を実践し、それによって自然の恵みに与ってきた。縄文に限らずその後においても、日本人は豊かな自然の中に、大きないのちの流れ、循環を感じ取り、その中に自分の命もまた委ねていくという宗教性を大事にしてきたのだ。

たとえば、近年ベストセラーとなった五木寛之の『大河の一滴』<sup>4)</sup>などもその典型だといえよう。己という存在は、ただ大きないのちの流れの中にかき消えていく大河の一滴のようなものとして、自らを自己主張せず、自然の中に謙遜に溶け込ませていくことで、ある種の永遠性の中に救いを見いだそうとしているといえようか。あるいは、『千の風になって』という歌が日本で多くの人た

ちに愛されたのも、こうした自然の大きないのちの流れこそが魂の安らうところと信じてきたという事実を想わせる。「墓の中にはいない」というメッセージは、もともとの歌詞にどういう意味があったにせよ、日本人の心にはそれが復活によって墓が空であるとは思わない。自然の中のいのちの流れこそが死者の安らう場所なのである。

加藤周一は、そうした死生観として「死の哲学的イメージは、『宇宙』の中へ入って行き、そこにしばらくとどまり、次第に溶けながら消えてゆくことである」<sup>5)</sup> とのべ、「一般に日本人の死に対する態度は、感情的には『宇宙』の秩序の、知的には自然の秩序の、あきらめを持っての受け入れということになる」<sup>6)</sup> と言っている。

祖先儀礼では、死んだ者の魂を鎮めていくが、その魂の休むのは「山」であると信じられてきた。共同体の最も近い山において、死者の霊は祖先の霊と一つになっていくと考えられたが、その祖先の霊は地域の守り神であり、同時にその共同体に実りをもたらす神と信じられてきた。普段はその「山の神」であるが、季節になれば山桜と共に里に下りてきて、「田の神」となる。そうして、田んぼにいのちの恵みをもたらすのである。つまり、死者の魂は、しだいしだいにその個人の存在を自然の中の大きないのちの流れの中に返していくと信じられてきたのである。

## 第2章 ルターの「聖徒の交わり」

こうした日本人の持つ宗教的な求めに対応して、今回は「聖徒の交わり」の概念がどう向かい合うものであるかを示してみたい。

「聖徒の交わり」は使徒信条の第3条にあらわされた言葉で、聖霊の働きにおいてキリストの福音が信仰をとおして一人ひとりに実現される姿を示したものと見てよいだろう。プロテスタント教会ではルターに倣って、この言葉が「教会」を言い表すものとして受け止められている。

この「聖徒の交わり」の概念には日本人の二つの伝統的宗教性、もしくは宗教的なニーズに向か

い合う、きわめて大切な要素が含まれていると理解される。

### (1) 死者も生者も含むすべての信徒の交わり

「聖徒の交わり」。まず、ここでいう「聖徒」とは誰のことか。ルターによれば、それは特別な宗教的功績をもった聖人ではなく、キリストに結ばれたものとしてのキリスト者全体を意味する。つまり、この「聖徒の交わり」の概念の中心にはキリストと信仰者との交わりがある。ルターは、「喜ばしい交換」もしくは「幸いな交換」<sup>7)</sup> という表現によって、キリストと信仰者における義と罪との交換がおこされるといい、それが恵みによる罪の赦し、私たちが義とされ、聖とされる基と見ている。これこそが私たちとキリストとの結び付きであり、交わりであって、それによって私たちに罪の赦しと永遠の命が与えられる。ルターによれば、このキリストとの交わりこそが私たちの信仰の中心にあるということである。聖徒とはこのキリストの義によって、聖とされた者という意味で、すべてのキリスト者のことであるから、「聖徒の交わり」とはそうした聖徒たち、つまりすべてのキリスト者、信仰者の交わりという意味がある。

この「聖徒」のなかにはただ二種類の聖徒があるといい、生きている聖徒たちと死んだ聖徒たちがあるという<sup>8)</sup>。つまり、すでに地上の生活は終えていても、死に打ち勝つキリストの永遠の命にあずかった聖徒たちは、キリストのゆえに地上の聖徒と共に同じ交わりの中にある。

こうした、交わりがキリストの福音の現実において、信じられていることは極めて重要である。たとえば、実際に死の床においても、このすべての聖徒の交わりが死の孤独をいやすのである。

キリスト者は誰でも臨終に際しては、自分がひとりだけ死んでいくのではないということを確認し、むしろサクラメントの占めるところに従って、多くの目が自分に注がれていることを確信しなければならない。

第一に、キリスト者は神の言葉を信じ、神の sacrament にすがっているのであるから、神とキリストご自身のめが注がれる。次には天使と聖徒たちとすべてのキリスト者たちが見守っている<sup>9)</sup>。

こうした死者も生者もともに神の前にあり、その交わりがイメージされる中で福音の内実、永遠の命の現実が経験される。そして、死に行く者へ、その死の克服が約束され、死の恐れとなる孤独に対して、この生きている者もすでに召された者も共にある、すべての聖徒たち交わりが示されていることは、日本人の共同体志向型の霊性に対する具体的な応答となると言えるだろう。

## (2) 包括的救いを示す *communio sanctorum*

日本の自然志向型の霊性は、豊かな自然のいのちの流れを見出し、その母なる自然の包容性の中に救いを求めるものであるとあってよいが、現代において、こうした宗教性への着目はいわゆる人間文明による自然破壊に対し、一定の批判的視点つまり自然保護思想を背景に持っていると考えられる。実際、キリスト教の信仰が人間中心であるのではないかという批判も繰り返される。

しかし、もちろんキリスト教において、すべての被造物の支配者であり、その中心にある者は人間ではなく、神ご自身であることは言うまでもない。また、人間は土のチリからとられ、チリに還るべき存在にすぎないのである。そこには明らかに自然の一部である人間の性質が表されている。さらに言えば、人間の犯した罪こそがこの自然(地)の呪いの原因であることを聖書は隠さない。だからこそ、パウロが言うように呻きつつ被造物全体が救いを待ち望んでいるのである。

しかし、たとえば「聖徒の交わり」という概念が、救いの現実を見出す言葉であり、また具体的な神と人間の関係概念であるとする、やはり、ここにはキリストによって聖とされた人間の交わりが考えられていて、自然への着目はないということになるだろうか。

ところが、そう言い切れない。むしろ、ルターの中にはそうした人間中心的な考えを徹底して乗り越えていく視点があると言える。ルターにおいては、たしかに *communio sanctorum* は信仰者の集まりという意味合いで、「聖徒の交わり」と理解されていることが多い。しかし、実は *sanctorum* を男性複数二格ととらず、中性二格として「聖なるものとの交わり」として理解している場合もある。

私はこの地上にひとりのかしら、キリストをいただく聖徒たちばかりの聖なる小さな群れ、あるいは会衆のあることを信じる。それは聖霊によって召し集められ、同じ一つの信仰、精神及び理解に立つものであり、さまざまな賜物を持ちながら、なお愛について一致し、分派分裂のないものであることを信じる。私もまたこの会衆の一員であり、この会衆が所有する一切の財宝にあずかる者であり、その共有者である<sup>10)</sup>。

この場合、「聖徒の交わり」において、信仰者はたがいに持つあらゆる宝をまた分かち持つということを行っているわけだが、こうした意味が *communio sanctorum* の概念の中に含まれて理解されていることは重要なことである<sup>11)</sup>。

つまり、この「聖徒の交わり」と訳されていることばは、必ずしも人間だけの交わり、信仰者の集まりということだけではない、その信仰者に与えられているすべてのものが、キリストのゆえに善いものとされ、それが分かち合われることが示されているのである。

神様に創造され、愛された一人ひとりには何が与えられたのであったか。小教理問答の使徒信条の第1項の解説にルターが神の創造の賜物として記しているすべての被造世界がいわば与えられた賜物であると理解されてよいだろう。そうであれば、この *communio sanctorum* は決して人間のみの救いの状態をイメージするのではなく、むしろ、キリストによる包括的救い、被造物全体に対

する救いが考えられるべきだといえるのではないか。

そうした意味での「聖徒の交わり」が、日本人の自然志向型の靈性に向かい合うとき、日本人が自然そのものとの連続性の中に自らの命のありかを見出すのに対し、その命そのものの創造、真の生命の源としての神との関係の中で新たに救いの道筋を示すことができるのである。

ルター自身によっては十分に展開されているわけではないし、むしろそうした理解が「聖徒の交わり」という基本的な考えのなかに暗示される程度だとしても、むしろ今日的な課題のまににルター神学を展開させていくことに問題はないと思われる。

実際、たとえば、アメリカの福音ルーテル教会の新しい式文、ELW (Evangelical Lutheran Worship) 中の聖餐の交わりでは、パンとぶどう酒におけるキリストの現在について次のように書かれている。

現在の「どのように」は、他のいづくにおいても同じように、このサクラメントにおいても、説明されえないままである。サクラメントにおいては見える媒介物が用いられていてさえも、この現在は隠されたままなのである。この地上の要素は、神的現在にふさわしい媒体であり、かつまた、これ、すなわち私たちの生活の日常的な物がすでに始まった新しい創造に参加しているのである<sup>12)</sup>。

この「現在」とはキリストの現在のことであるが、この項目にはその神秘性が語られる。

ここで着目したいのは、このパンとぶどう酒が聖餐の、つまり復活のキリストの体と血に用いられているということが、新しい創造に対するこの世の物質の参与として描かれているということである。この終末論的な視点が明確に示されることで、聖餐の本質をより大きな神の救済の道筋のなかに位置づけるものとなっている。つまり、この

聖餐の恵みの中には、単に罪の赦しというわたしたちの個人的な救いの次元ばかりではない、いわゆる終末の待望とまたそこでの全被造物に対する救い、つまり宇宙論的な救いの次元が開かれていることが示されているのである。

「聖徒の交わり」は、神が私たちに賜った賜物、またすべての被造物が神ご自身の御心に聖とされ、それを確かに喜びを持って分かち合い、その恵みに生かされていくことである。そして、今の聖餐の交わりは、やがて私たちがそのすべての被造物ともに新しい御国に生かされる喜びの祝宴の先取りであり、また、その御国への招きと参与のしるしなのである。

ルター自身にこのような視点がどれだけ明瞭であったかは別にして、こうした理解が、ルター神学の現代的展開の中でなされていることは極めて重要といえよう。

### 第3章 日本の靈性からの問い

#### (1) 非キリスト者の救いの問題

日本人の宣教の中でも最も大きい躓きのひとつは「信仰を得ないままこの世の生を終えた祖先」の救いの問題である。

実際、communio sanctorumは排他的な概念であろうか。「信じて洗礼を受けるものが救われる」のであれば、この「聖徒の交わり」は非キリスト者に対してそれをうちに含んでいると簡単にいうわけにはいかない。たとえば、ベレンツェンも日本の宗教性とキリストの福音のかかわりを論じつつ、聖徒の交わりcommunio sanctorumの重要性を指摘している。キリストにあって生きている者も死んでいる者も共にこの交わりに生きるという視点が、日本人の死生観と重なることを考え指摘しているのである<sup>13)</sup>。しかし、「聖徒の交わり」のメンバーシップは洗礼を受けたキリスト者のみに限定して考えられなければならない。アフリカの神学者ファッショーレ・ルカはその点をあいまいにし非キリスト者もこの聖徒の交わりに含まれるとした<sup>14)</sup>。しかし、こうした考えは、結局救

いそのものが何であるかということをあいまいにするものでしかないので、退けられなければならない。聖徒の交わりと、家族の交わり *communio familiae* は区別されるのだと論じられる<sup>15)</sup>。

愛する関係にあった家族が既にその生涯を終えている場合、遺されている者にとってはその死者の救いの問題について一切の手立てがないかの如くに語られない、教えられないことは、日本のような宣教地では躓きの要素となる。日本の伝統的な祖先儀礼は、死者とのつながりを感じ、共に生きるあり方の中で、遺された者の精神的、霊的ケア、グリーフワークを担ってさえいるのである。また、生きている間には、死に行く者のために十分なことをすることができなかつたという後悔の気持ちに対して、日本的な祖先儀礼は、具体的にその心のニーズにこたえるものなのである。つまり、死者の平安のためにまだ何かをなし得るということになるからである。そして、そういう手立てが与えられれば、遺された者には死者に対するなすべき務めがあるということになる。このことは実際に、遺された者が自らの生の意味を見失うような大きな精神的痛手を持っている場合に、死者のために生きることを意味を与えることによって、具体的な支えともなるのである。

キリスト教信仰では、ただ、死者のことは神に委ねることが勧められる。その人の救いは、人の働きや業によって勝ち取られるものではなく、ただ神の恵みによるものだから、その恵みのみを信じ、神の愛に委ねることができるのである。それは確かにその通りであるし、それで十分に違いない。しかし、日本人の私たちには、この非キリスト者の救いに関わって語る言葉が、ただ、「委ねよ」というもので足りるのだろうか。何かをなすべきだというのではない。けれども、その「委ね」において、日本人の心にある死者とのつながりの霊性になにか応えるものが求められているのである。

## (2) 一人称の死と二人称の死

実際に祖先儀礼において、大事にされているプ

ロセスは、この儀礼によって死者を死者たらしめることだと言ってもいいかもしれない。日本では、この儀礼を重ねることで、しだいに死者が死んでいく。その完全な死は、つまり、個人の存在が全く自然のいのちの流れの中にかき消えること、もしくは誰その霊ではなく祖霊と呼ばれる集合的な霊に融合することで、弔い上げといわれる33年とか、50年という年月をかけると言ってもいい。

しかし、ここには深い死者に対する思いがある。

柳田邦男は、自らの息子が脳死になった時の記録を書きしるし、そこで二人称の死という問題を取り上げた。彼は、息子が脳死状態となつてなおしばらく続いた看病の間、息子と対話し、そして、息子の思いを聞き取りながら、何とか息子の果たせなかつた遺志を実現させたいと臓器移植の道を探し過ごす、ある時に「『よく頑張つた、いつまでもこのままではつらいだろう。そろそろ死んだことにしてあげるよ』という気持ちになつた。」<sup>16)</sup>と書いている。

二人称の死を経験するものは愛する者の死を経験しているが、その二人称の死を経験しているものが一人称の死を死んでいく死者に対し、その死のありようを決定しているのだ。その人のいのちの終わりは、その人の生命現象の終わりにあるのではなく、その人との深いかかわりの中にある者たちが、いかにその二人称の死を受け止めるかということにかかっている。

この第一人称と第二人称の死の未分化性は、決して否定的にばかり捉えられるものではないかもしれない。ここには、いのちや死が、個人のものとしてではなく、むしろ関係の中に置かれるというきわめて重要な問題が含まれている。

実践的に考え、こちらは葬儀の問題で、こちらはグリーフワークの問題として分けてしまうのでは、日本人の持つ宗教的な深みからの西欧的な考えへのチャレンジは見えてこない。日本においては、まさに他者とのかかわりの中でこそ、その人のいのちそのものが、生と死が決定される。決し

て、その個人の生物学的なものや、あるいは何らかの機能の停止、その人の社会的な存在ということがその個人の生と死を決める絶対的な尺度にはなりえないのである。愛する者が、その人の死を受容し、死んでいいということにしなければ、その人は死ぬことはないのである。

日本人の霊性は、自分のいのちを意味づけたり、あるいはその人の生きること死ぬることを決定付けるものが、その人自身の外に、他者の中に、しかも愛する関係の中にあることを具体的に構造として持っているのである。生と死の連帯性が、きわめて明瞭に表されている。

たとえば、柳澤桂子は、「いのちは誰のものなのか」と題した新聞のコラム記事<sup>17)</sup>で、重い病に苦しむ闘病の中で、自らのいのちをつなぐ点滴を抜いてもらえるように主治医と家族に頼んだことを記している。そして、彼女は予想をはるかに超えた反対にであった経験から、いのちが誰のものなのかという問いに次のように答えている。

いのちはその人個人のものであろうか？ そうであるなら、自分で自分の死を決めてよいのか。これにも疑問が残るのだ。私は自分の経験から、それはちがうと思う。一人の人のいのちは多くの人々の心の中に分配されて存在している。分配されたいのちは分配された人のものである<sup>18)</sup>。

私たちのいのちは、愛する関わりの中にある人々の心の中に分かち合われて存在するというのである。

私たちが生まれたときから、誰かにとっての娘や息子として、誰かにとっての兄弟・姉妹として、また誰かにとっての友人、誰かにとっての妻や夫、誰かにとっての親となっていく。そうした諸々の関係の中でこそ、「私」という他にはない一個の存在として生かされている。しかも、それぞれ個別の関係の中での「私」は、その関係の中では全く個別の存在でありうる。多くの相手の中にそれぞれの「私」が存在することを、私自身の

存在が一つの名前をもって統一せしめているということになろう。逆にいえば、私たち自身の中には、様々な他者との関係が生きられており、そうした諸々の他者を自分のうちに存在させつつ、この私という一個の存在であるのだ。

私たちはこのような生と死の連帯性、共同性をもった「私」を生まれながらに生きていることを自覚する時、「私」のいのちは私だけのものではないことを深く知っていく。あらかじめ、個としての「私」が確立して、その「私」が他者とかかわるのではない。むしろ、生まれながらにして、多くの他者との関係存在としてのみ「私」が生かされるのである。

#### 第4章 キリスト者のいのちの個と共同性

一人ひとりのキリスト者は洗礼によってキリストと一つとされ、そのキリスト者、信徒の集まりがキリストの体としての教会となる。これは、教会の理解としての正しい理屈であるが、こうした考え方の中には、どうしてその一人ひとりがキリスト者となるのかという宣教論的視点が見えにくい。現実的には、まず、教会の交わりの中にみことばが語られ、そこに福音に生かされる喜びが分かち合われなければ、一人のキリスト者も生まれないのである。だから、あらかじめ存在した信仰者個人が集まって教会が生まれるのではなく、教会の交わり、信仰の共同性の中にキリスト者個人が生まれてくるのである。

こうした信仰の個と共同性とダイナミズムは、西欧の神学の中であまり多く論じられてはいない。ただ、改めて日本の宗教性・霊性における生と死の共同性と個の関係に答えようとする時、信仰という神の出来事において与えられている豊かな恵みに気がつかされる。そして、同時に日本人の霊性に対する問いかけも生まれてくる。そうした対話の中でこそ、改めて、神の出来事としての福音を深く味わうものとされるのである。

### (1) キリストにあって生かされる個人

信仰において私たち一人ひとりとは、かけがえのない一人として生かされる。それは、キリストが「私のため」(pro me) に十字架にかかれたということに基づいている。しかし、無条件に私が肯定されているのではない。罪人である自分は、その罪に死に、キリストに生かされるという死と復活の出来事が私を私として生かす神の恵みの業なのである。

たとえば、五木が『大河の一滴』において示したような自己についての謙遜さは、ついに自らを自然のいのちの流れの中にかき消していくものといつてよいだろう。それは自らに固執する業(ごう)にこそ、最も深い煩惱の一つがあると捉えるところからくる仏教的な開放感とも言えよう。

しかし、キリスト教の信仰においてもまた、この自分の救いにこだわる自己中心性にこそ、罪の深みを見出しているのであって、自己における謙遜さという徳を誇るものにもなりえないように神の律法の裁きの前に「わたし」は小さくされるのである。そこにはほかの誰かではなく、みことばにおいて、「わたし」が滅ぼされるべき存在として示されてくる。しかし、その私がおキリストの愛に生かされる個人でもある。それゆえに、福音は私を捉える。つまり、信仰においてはキリストと一つになった私が生かされる。

だが信仰は正しく教えられるべきである。すなわち、信仰によってあなたはキリストと結びあわされて、あなたとキリストはあたかもひとり的人格のようになり、引き離されることができず、いつまでもキリストに固着して「私はキリストのようだ」と言うのである。逆にキリストは「私はあの罪びとのようだ。彼が私に、私が彼に固着しているからだ。われわれは信仰によってひとつの肉、一つの骨に結びあわされているのだ」といわれる<sup>19)</sup>。

たとえ、他者との結びつきが強くと、そこに未

分化な一致があったとしても、一人一人が神の言葉によって見出されてくる。そこで罪人としての「私」が知らされる。けれども、その私はキリストによってかけがえのない命へと今一度生かされる。パウロの回心が示すように、新しい命は、律法と福音のダイナミズムのなかに創造される。

イエスの喩において「失われた一匹の羊」を探し求める神の憐れみが見出されるように、神の恵みは一人ひとりを生かす福音であることは疑いえない。

こうした、キリスト教信仰における「個」としての新しい自分のいのちの積極的な展開は、共同体における「和」を重んじすぎる日本の靈性に大きな問いかけを持つものだ。なぜなら、共同体志向型の靈性は、時として共同体のために「個」のいのちの犠牲としていとわれないということが歴史の中に見出されるからである。家のため、会社のため、国家のために犠牲を強いる価値観は、本当に一人ひとりを生かす力を持たないと言わざるを得ないだろう。

### (2) 「聖徒の交わり」の共同性

ルターは、キリストと結ばれた、いわばキリストとの共同性から、さらに他の人々との信仰における共同性を述べている。

人間は喜んで自らを力づけ、慰めて、かつ、次のように言うことができるのである。「私は罪人である、私は罪におちた、あれやこれやの不幸に見舞われた。だがよい、私はサクラメントに行こう、そしてキリストの義と、生命と苦難とが天上の聖なるみ使いや聖徒たちや地上の信仰篤き人々と共に、私の味方であるとの、神からの一つのしるしをいただく。私が死ぬことになっても、一人で死ぬのではなく、私が悩み苦しんでも、彼らが私と共に悩んでくれる。わたしの一切の災いは、キリストと聖徒たちとに共有のものとなってしまっている。私に対する彼らの愛の確かなしるしを、私が持っているからである」と<sup>20)</sup>。



いのちはもはや、私ひとりのものではない。すべての聖徒たちと共にされている。これは日本の霊性の中で私と愛するものとのかわりが、未分化なままに一体であるというとは異なるが、しかし、近代におけるいのちの個人主義を乗り越える視点だと言ってもよい。近代的な個の出発はデカルトのコギトにおけるように認識の主体として確立されてくるものだが、中世のルターの信仰においては、明らかにそうした西欧近代の個とは異なった信仰における個と共同の道筋を見出すことができるのではないか。

かくて、キリストの聖なるみことばにおいて、キリストに加えられたいっさいの不名誉、教会に負わされたいっさいの苦悩、咎なき者たちにふりかかったいっさいのいわれなき苦難、こうした事がらで、この世界の至る所は目下あふれんばかりであるが、これらすべてがあなたにとって苦難とならなければならない。そこで、あなたは防御し、行動し、祈らなければならない、また、もしそれ以上のことができないときには、衷心からの同情を寄せなければならない。見よ、これがとりもなおさず、逆に、キリストとその聖徒たちの災難と災厄とを負うということであって、ここに「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです」〔ガラテヤ六章二〕というパウロの言葉が当てはまるわけである<sup>21)</sup>。

私たち一人ひとり、キリストを負い、また他のすべての聖徒たちを負うものなのである。ここには、信仰における連帯、その深い共同性を見出すことができる。

西欧の個人主義で考えるときは、私の罪は私だけのものである。自分のことでなければ、その罪を問われることはないのは当然である。しかし、本来のキリストにおける聖なる交わりにおいては、互いに重荷を負い合うのだし、他の人が課題

として担ったものは分かち合われるのである。共同で、私たちの罪を担い、祈りをともにしていくことができるのだし、求められている。

しかし、おそらくここでも個人的そして人間的な思いのなかで直接に連帯することに対しては、その思いや願い祈りといったものがキリストによってとりなされて、きよめられる必要を知らなければならぬ。人間的な愛は、どれほど純粹にみえてもそこには罪が巣食っているのである。ルターは、14歳で亡くなった娘に対する愛について、次のようにいう。

今話しているのは、自然的な愛のことですが、それはそれ自体良いもので人間的ですが、神さまの良い、受け容れられる、完全なみ心が行なわれるために、その自然的愛は苦しまなければならないということです。何故なら、神さまのみ子は、すべてが彼を通して、彼によって完成させられるのですが、求められないのに、またそのようなことはしなくてもよいのに、ご自分の命を与えてくださったのです<sup>22)</sup>。

つまり、人間的なものはキリストによって聖められなければ、神の御心を実現することにならず、そこに生まれる関係性はゆがんだものになってしまう、平安をもたらすことに役立たないのである。「聖められなければ」というのは、翻訳では「苦しまなければ」とされているが、「十字架につけられなければ」という言葉である。滅ぼされ、しかし新しくキリストに生かされるということである。連帯性だけが求められるなら、時として、憎しみや恨みが死者との連帯を生み出すこともある。しかし、そうして生まれる連帯性では、悪が悪を生み出すようなことが結果するに違いない。けれども、キリスト教は、その連帯の中心にキリストを持っている。そこに個人の思いによってではなく、キリストの生の意味を享受することになるだろう。それは、また日本人の霊性に対する新たなチャレンジともなるに違いない。

### (3) キリストの体としての「聖徒の交わり」の 日本的靈性に意味するところ

洗礼をうけることのなかったものの救いについて、私たちは何を示すことができるか。見える教会と見えない教会の議論も重なるが、私たちはどこからどこまでが真実の教会、救いの範囲を定めることはできない。それは神のみが知るところ。むしろ、そうした問いの前には、キリストの中心性を示すことがルター的であるといえよう。

「聖徒の交わり」は、キリストの体としての教会と理解される。洗礼と聖餐の恵み手段をとおして、キリストと一つにされ、すべての聖徒たちと一つのからだとされている<sup>23)</sup>。

もし教会がキリストご自身であるとすれば、そのキリストが罪人として捨てられ、虐げられた人々に変わることなく、出逢い、恵みを分かち、癒し、食事を共にされたことは何よりも、この洗礼を受けていない、キリスト信仰に至っていない人々に向けて、どのような姿勢を示していくべきものかを教えるだろう。教会の周囲にその垣をめぐるのではなく、中心がこのキリストであることを自覚しなければならない。

そして、このキリストが、町の外で十字架に架けられるとにおいて、罪びとを招くお方であることが知られるならば、このキリストの体としての「聖徒の交わり」がどのようなものであるかを私たちは深く知ることとなる。キリストは罪びとのところに出かけて行って、その者たちに手をさしのばし、語りかけ、罪を赦し、これを愛し、癒していかれた。

そうであれば、「聖徒の交わり」が教会として、非キリスト者に対して、排他的に戸を閉めるのではなく、むしろ、その人たちがなお教会の外にあるものとしても十分に尊重しつつ<sup>24)</sup>、手を広げ、まだ遠くにいる姿を見出し、駆け寄る姿勢を持っていることを表すものだといえよう。

キリストご自身の姿勢を確認することは、キリストの体である教会の姿勢を生み出すのである。つまり、教会が非キリスト者の葬儀や記念会などの実践的な道を示すことになる。すでに死んだ死

者の救いを、私たち人間が勝手に決めたり、確認することはできない。それは神のみ業であり、神の決められるところにある。だから、私たちは神にゆだねなければならないのである。しかし、キリストの姿をこそ私たちが絶えずかたどっていくべきであることを宣教の実践と結んで理解するのであれば、キリストの似姿は、私の救いのためではなく、いつでも他者のために奉仕するためのものである。教会が内向きになるのではなく、いつでも他者に向けて開かれた業をこそ考え、そして実行していくことが大切なのである<sup>25)</sup>。

柳澤桂子は、私のいのちが他者の心の中に「分配された」といい、「分配されたいのちは分配されたひとのもの」とさえ言ったが、キリスト教の信仰においても、日本人の共同体志向型の靈性と同じように、他者のすべてを分かちあう連帯性、共同性は確認された。考えてみれば、キリストのいのちを私たちは聖餐の交わりにおいて「分配」しているのである。この信仰者とキリストの交わりは、信仰者相互の交わりをもつくりだすのである。そうしたいのちの深いつながりを考えるときに、私たちはさらにこのようにいうこともできるのではないだろうか。

「あなたの死んだおばあちゃんは、神様のことも知らず、また洗礼を受けることもなかった。でも、そのおばあちゃんは、あなたの中に生き続けているでしょう。そのおばあちゃんをしっかりと胸においたあなたがキリストに救われるのであれば、あなたの中のおばあちゃんも一緒に救われないはずがあるだろうか。そのおばあちゃんはあるあなたの中に生きているのだから…。」

これは、非キリスト者の救いについて教える、教義学的な命題ではない。しかし、実践的、牧会的に語りうる言葉として熟考していきたい、日本人の魂に向けた「試みの答え (a tentative answer)」なのである。

## (注)

- 1) こうした指摘は、隅谷三喜男の以下の著作においても確認できる。『日本の信徒の「神学」』日本キリスト教団出版局 2004年。特に、第1部 日本人とキリスト教。
- 2) 加藤周一・M. ライシュ・R. J., リフトン『日本人の死生観』下, 岩波新書, 1977年, 209頁
- 3) 同, 209頁
- 4) 五木寛之『大河の一滴』幻冬舎, 1998年
- 5) 加藤周一・M. ライシュ・R. J., リフトン『日本人の死生観』下, 岩波新書, 1977年, 211頁
- 6) 同, 214頁
- 7) ルター「ガラテヤ大講解」『ルター著作集第二集 第11巻』418頁
- 8) L. ピノマ『ルターの神学概論』石居正己訳, 聖文舎, 1968年, 229頁
- 9) ルター「死への準備についての説教」ルター研究所編『ルター著作選集』67頁
- 10) ルター「大教理問答」『ルター著作集第1集 第8巻』476頁
- 11) Paul Althaus, *The Theology of Martin Luther* trans. by Robert C. Schultz (Philadelphia: Fortress Press, 1966), 294-296.
- 12) Evangelical Lutheran Church in America, *Renewing Worship 2: Principles for Worship* (Minneapolis: Augsburg Fortress, 2002), 123.
- 13) Jan-Martin Berentsen, *Grave and Gospel* (Leiden: E.J. Brill, 1985), 208.
- 14) Ibid. 213.
- 15) Ibid. 214.
- 16) 柳田邦男『犠牲 サクリファイス わが息子・脳死の11日』文藝春秋, 1995年, 215頁
- 17) 柳澤桂子「いのちは誰のものなのか」朝日新聞 2005年1月11日朝刊, コラム記事
- 18) 同, 4段目7行目から14行目
- 19) ルター「ガラテヤ大講解」『ルター著作集第二集 第11巻』253頁
- 20) ルター「キリストの聖なる神のからだの尊いサクラメントについて」ルター研究所編『ルター著作選集』102頁
- 21) 同, 103頁
- 22) ルター『ルターの慰めと励ましの手紙』T. G. タップパート編, 内海望訳, リトン, 2006年, 92頁
- 23) 同, 108頁
- 24) ファッション・レ・ルカがそうであったように、私たちにこの「聖徒の交わり」のなかに、信仰に至っていない人をも無前提に含みいれてしまおうとする誘惑がある。しかし、この未だ外にある人を勝手に交わりに加えて考えることは、その人の信仰の歩みや道筋を本当に尊重することにはならない。
- 25) ただし、ここでは深く論じる余裕はないが、こうした教会の開かれた姿勢と業を、まだ洗礼に至っていない人々に聖餐に与らせるようなことと理解することは厳につつまなければならぬ。それは、救いについて、教会について、その中心をあいまいにする。神の恵みのみ業、キリストの現在をこそ、私たちははっきりとしめしていかなければならない。信仰の秩序を保ち、一人ひとりを本当にキリストに導くために、私たちがなすべき働きをあいまいにしてはならない。

## Luther's Perspectives on *Communio Sanctorum*: Dialogue with Traditional Japanese Spirituality

Ishii, Motoo

Behind the practice of ancestral rites in Japan lie two traditional types of spirituality: community-oriented spirituality and nature-oriented spirituality. It could be said that these two traditional Japanese spiritualities are obstacles for Christian mission work. At the same time, Japanese spirituality challenges Christians in the areas of individualism and ecological crisis. It is important for mission work to show how the Christian gospel answers the needs and challenges of Japanese spirituality.

This article aims to explore how the concept of *communio sanctorum*, as elaborated by Martin Luther, might address the challenges of Japanese spirituality. It will also demonstrate that the concept of "the community of saints," both living and dead, refers both to the fellowship of all believers before God and to the hope and promise of a comprehensive salvation regarding all creatures.

This dialogue between Japanese spirituality and the Christian concept of *communio sanctorum* poses a serious question about the salvation of non-Christian ancestors. A tentative answer to this is proposed as a practical and pastoral response.

**Keywords :** *communio sanctorum*, Japanese spirituality, ancestral rites, M. Luther, indigenization